

## 途上国支援に自社リソース活かす



Durban 港に向かう当社自動車船  
に船積みされる移動図書館車

株商船三井 経営企画部  
CSR・環境室  
室長 永田 順一

商船三井は社会貢献活動の理念として、①国連ミレニアム開発目標への貢献、②生物多様性保全・自然保護への貢献、③所在する地域社会への貢献の3つを掲げ、当社のリソースである船舶やコンテナを活用しグローバルな活動を展開している。本稿では、そういった取り組みの一部を紹介したい。

### 本を待つ子どもたちのために — 移動図書館車の海上輸送 —

NPO 法人“SAPESI - Japan”は、南アフリカ共和国（以下、南ア）教育省が進める識字率向上計画に協力し、移動図書館車の寄贈活動を展開している。アパルトヘイトの影響もあり教育格差の著しい南アでは識字率が低く、子どもたちが本に触れる機会も少ない。移動図書館車が巡回し絵本や図書に出会った子どもたちは文字に興味を持

出港式に勢ぞろいした移動図書館車



駐日南ア大使から感謝状

車内で本を手取る生徒たち

ち、識字率の向上につながる。

日本では多くの地方自治体が移動図書館車を運行し、一定サイクルで車両を入れ替える。日本での役割を終えた移動図書館車の提供を受け、南アで再活用するのがこの活動である。

しかし南アは遠く、輸送手段は船とならざるを得ない。2009年6月、SAPESI - Japanの要請を受けた当社は、国連ミレニアム開発目標の1つである“普遍的初等教育の達成”に資する活動であることから輸送協力を約し活動はスタートした。

09年10月、全国から出港式会場に集まった移動図書館車は実にさまざまであった。車両整備はされているもののペイントはそのまま。北は北海道から南は徳島まで、それぞれ寄贈元の自治体名やひらがなの愛称が描かれている。見慣れないひらがなや漢字に出会ったアフリカの子どもたちはきっと驚き、でも日本を好きになってくれるであろう。こうして、最初の寄贈車を積んだ自動車船“EUPHONY ACE”は横浜港を後にし、南ア・Durban港に旅立った。

昨年12月の出港式は「日本・南ア交流100周年記念事業」の式典ともなり、グローバル駐日南ア大使、来日中の南ア国会議員視察団と共に、南アに向かう移動図書館車の門出を祝った。

寄贈車は10年度までに21台が南ア各州に届けられ、図書室のない小・中学校を定期的に巡回して本を待つ子どもたちのために活躍中だ。この活動は6年間で100台の寄贈を目標としており、当社として今後も協力を

続けていきたい。

車両の海上輸送については、認定 NPO 法人 “Side by Side International” が推進するカンボジアの救急システム構築のため、日本で使用しなくなった救急車や消防車をコンテナに収納して輸送協力する活動なども行っている。

## 妊婦と乳幼児の命を守る —靴の輸送とコンテナハウス—

NGO “ジョイセフ” は、「ザンビアの子どもたちに靴を贈る」プロジェクトを推進している。当社はその趣旨に賛同しコンテナでの輸送協力するとともに、当社のコンテナを無償提供している。

ザンビアでは、子どもたちの多くが裸足<sup>はだし</sup>で生活をしている。靴を履くことで寄生虫病や破傷風の予防につながるが、実は、靴の贈呈にはもう1つの大きな目的がある。

途上国では、出産に関する教育が不十分なことから母子の死亡率がかなり高いが、その命を守ることがジョイセフの大きな活動目的である。ザンビアでも、妊婦は出産知識を持たないまま、健診にも行かず助産師さんもない自宅で出産することも多い。その結果、母子の死亡率も高いとのこと。当社が輸送した靴は妊婦健診の際に手渡されるため、保健衛生教育につながる重要な役割も果たすのである。



日本から届いた靴を履く

コンテナは、診療所近くに設置され、窓を開けベッドを入れるなどして妊婦の健診や出産ができるように改造され、身近なマタニティハウスに生まれ変わる。



2本のコンテナでジョイセフが作ったマタニティハウス  
(写真提供：ジョイセフ)

このマタニティハウスでも、靴は母親や子どもたちを集めるツールとなり、ここで出産や保健・衛生に関する知識などの冊子を配って教育したり、健診を受けてもらったりするのである。こうして子どもの成長とともに日本の多くの家族から提供された靴が、当社のコンテナ船で海を越え、ザンビアの母子健康の向上に役立っている。靴が育む母子の健康を願う。

## 客船「ふじ丸」で被災地支援

東日本大震災では、救援物資の提供や義援金のほかに、自衛隊員や自衛隊車両、国際救援物資の海上輸送協力を行った。さらに、生活基盤を失った被災地の人々に当社として何ができるかを検討した結果、外航クルーズ客船「ふじ丸」による支援航海を実施することにした。



がれきの中、大船渡に寄港した「ふじ丸」



見送りに集まった被災地の皆さん

がれきが浮かぶ中を航行し、4月11日から17日の間、大船渡、釜石、宮古に寄港した。そして、被災者の方々、延べ4451人を招き、客船のあたたかい食事、ゆったりした大浴場と個室で心身を癒してもらった。大船渡市長の感謝の言葉に加え、被災者の方々からの感謝の寄せ書きにはクルー全員が感激し、支援の気持ちを新たにした。

エネルギー不足が続く中、ニーズが高まる LNG や石炭の輸送など、本業を通じた復旧・復興への貢献活動を、今後も続けていきたいと考えている。 ■

◆商船三井の社会貢献活動

<http://www.mol.co.jp/csr-j/society/index.html>